

# ハイデガー研究会・日本アーレント研究会共催企画 「「世界」と市民性——ヴィラのアーレント解釈を吟味する」

## 開催にあたって

青木 崇（一橋大学）

本シンポジウムは、2019年3月16日にハイデガー研究会のご協力のもと、日本アーレント研究会「第4回 春の定例会」として開催された。ハイデガー研究会からは、司会として陶久明日香氏に、報告者として金成祐人氏にご登壇いただいた。アーレント研究会からは百木漠氏と青木崇が登壇し、それぞれ報告した。

趣旨としては、2019年夏のディナ・ヴィラ氏招聘に向けて、アーレント解釈をはじめとするヴィラ氏の研究を振り返りつつ、その研究を介してハイデガー研究とアーレント研究の間での交流を図るものであった。ヴィラ氏は1996年の『アレントとハイデガー——政治的なものの運命』でハイデガーとアーレントの思索的な関係を主題的に扱い、アーレント研究に大きな衝撃を与えた研究者として知られており、その研究についてハイデガー研究とアーレント研究、双方の立場から吟味することはとても意義深いものになった。アーレントはハイデガーの思想をどのように活用し、自らの政治理論へと鍛え上げたのか。また、ハイデガーとアーレントの交流には、ヴィラが解釈するのとは別の可能性があるのではないか。こうした問い合わせ立てることができた。

シンポジウムの具体的な内容を振り返る前に、簡単にヴィラ氏の研究を紹介しておきたい。その主著『アレントとハイデガー』(1996)よれば、アーレントは、ハイデガーの「解体」とベンヤミンの「歴史の天使」に学んで西洋政治哲学や行為論の伝統を解体しながら、ハイデガーの自由論を活用することで政治的自由を世界的なものとして描き直した。そのようにしてアーレントは政治的行為を世界的な「演技」として、また政治をそのような演技的行為による「闘技」として捉えた。1999年の『政治・哲学・恐怖』でヴィラは、ハイデガーとアーレントの関係、とりわけハイデガーのナチス問題に対するアーレントの態度を取り上げ、また闘技民主主義との同一視を避けるために自らのアーレント解釈を「劇場的モデル」と表現し直し、他の公共性論の中に明確に位置づけた。それと同時に、アーレントにとっても大きな課題であった、市民と哲学の関係（その念頭にはハイデガーの思索という問題もある）を、アーレントの枠組みを超えて「哲

学的市民」や「ソクラテス的市民」という概念で問い合わせてもいる。この課題は『ソクラテス的市民性』(2001)に引き継がれる。さらに、『公的自由』(2007)では、アーレントに学びつつもアーレントとは異なった仕方で西洋政治哲学の伝統の中から公的自由を拾い上げている。

これらの著作のうち、金成氏には『アーレントとハイデガー』についてハイデガー研究の立場から批判的にご報告いただいた。百木氏には『政治・哲学・恐怖』を担当していただき、『公的自由』を青木が担当した。報告それぞれの内容についてはハイデガー研究会のジャーナルとアーレント研究会のジャーナルの間で交換掲載をさせていただくので、そちらをご覧いただきたい（金成氏のご報告は、アーレント研究会会報『Arendt Platz』第5号（近刊）に掲載予定である）。

金成氏は、ハイデガー研究の立場からヴィラのハイデガー解釈を批判的に検討しつつ、とりわけ「死すべき者たち」というアーレントも興味を示した後期ハイデガーの概念に着目してハイデガーとアーレントの別の共鳴の可能性を究明している。百木氏は、『政治・哲学・恐怖』の多岐に渡る議論を明快に整理し、その上で、ヴィラが主張する政治の闘技的-劇場的モデルとソクラテス的市民性がどのような関係にあるかという問題を浮かび上がらせた。青木の報告は、『公的自由』の中でもとりわけ「アーレントとハイデガー、もう一度」（第9章）に着目し、『アーレントとハイデガー』を1990年代の状況から捉え直すと同時に、「開示性」に関してヴィラの解釈を批判することで「複数性」と「多元主義」を架橋しようとする試みであった。

質疑応答もたいへん興味深いものであった。二つ挙げるとすれば、一つは、ヴィラがシェルドン・ウォリンによるアーレント批判として取り上げる「共通性」という論点である。ウォリンは「複数性」を強調するアーレントに対して、政治とはむしろ人々の間の共通性を再発見していく営為であると主張する。しかし、質問者によれば、ウォリンにとっても「複数性」と「共通性」はコインの裏表として探求されるべきものである。もう一つは人間の「有限性」に関するものであった。ヴィラは、被投性や非主権的自由の文脈では人間の有限性に触れるが、「可死性」や「誕生性」、「人間の条件（制約性）」といった、人間の有限性に関するアーレントの課題についてはほとんど論じていない。有限性の問いはハイデガーから受け継いだものであるように思われるが、そうだとすれば、アーレントの描く政治はいかなる仕方で人間の有限性に根ざしているのだろうか。このことを端的に問いかける質疑であったように思われる。

末筆ながら、ご登壇を引き受けてくださった陶久先生と金成先生をはじめ、今回の企画を快く承諾してくださった齋藤元紀先生、立正大学での会場の借用を含め諸々のご助力を賜った木村史人先生、その他ハイデガー研究会の皆様にこの場を借りて心より御礼を申し上げたい。

Takashi Aoki

*Introduction to the Symposium: “World” and Citizenship*